令和５年度
第２回ふくしま元気トーク　まとめ

【 開催概要 】

日　時	令和５年１０月１日（日） 午前１０時１５分～１１時４５分
テーマ	「チャレンジ 2050 ゼロカーボンふくしま市」の実現に向けて
会　場	こむこむ（※2023 ふくしま環境フェスタと同時開催）
出席者	ふくしま環境基本計画推進協議会（E-Act ふくしま）委員のみなさん 田崎由子さん（福島県地球温暖化防止活動推進センター　うつくしま地球温暖化防止活動推進員） 菊田秀之さん（福島県北森林組合　専務理事） 鈴木明美さん（学校法人東稜学園福島東稜高等学校　総務部長） 内池徹さん（福島日産自動車株式会社　新車部長兼電気自動車営業部長） 池田寛さん（株式会社アポロガス） 丹治千尋さん（株式会社いちい　管理本部総務人事部課長） 山崎純司さん（東北電力株式会社福島支店　企画管理部門（総務広報）部長（地域政策担当）） 桜井美菜子さん（気象庁福島地方気象台　調査官）
（福島市）	木幡浩　福島市長

【1　市長あいさつ】

この度福島市脱炭素社会実現実行計画を改定しました。これまでは2030年度に実質的な温室効果ガスの排出量を30%削減しようという目標にしていました。国も昨今の温暖化の進行に対応して2030年度に50%まで削減しようと計画を改定したのですが、福島市はこれまでの取り組みなどを踏まえて55%削減、要するに国より一歩進んだ数字を目標に進めていこうとしたわけです。その点では、取り組みの進化、本格化が求められるわけで、徹底して進めていかなければと思っています。

一方で、何でもかんでもゼロカーボンを目標にできるわけではありません。市では 8 月 31 日に「ノーモアメガソーラー宣言」というのを発して、山地におけるメガソーラーはもうこれ以上要らないということを明言しました。今後、太陽光発電、特にメガソーラーによる再生可能エネルギーの創出を自分たちから閉ざしたわけです。そうなると、それに代わる手段を強化していかないと、2030 年度の 55%削減はおぼつかなくなってくるわけです。再生可能エネルギーの推進という点でいえば、地域共生型の再生可能エネルギーを推進しようということなのですが、もう一つ重要な要素は、排出する二酸化炭素を減らせば再生可能エネルギーの発電量が少なくても済むことです。その点では、省エネ、省資源の取り組みをもっと強化すれば、太陽光発電などでエネルギーを創造する部分が減るので、その取り組みと併せて進めなくてはいけないわけです。こういったことも宣言に書いてあります。ゼロカーボンというのは、排出抑制と、温室効果ガスが発生しない新たなエネルギーへの転換と、この両面をやっていかなくてはならないわけで、皆さんには、その両面にわたってご意見いただければと思っています。

【２　主な発言内容】

（１）ゼロカーボンに対する現状の認識や取り組み内容

〇田崎由子さん

私は家庭部門からいろいろ活動していますが、一歩一歩積み重ねていくことが大事だと思っています。学校でも、子どもたちがいろいろ勉強していて、実践していると思いますが、私たち推進員は、そういった皆さんの一歩踏み出す背中を後押しする役目があるのかなと思っています。

今回、地球温暖化防止が学べるツールとして、「地球温暖化防止かるた」を作成しました。これは、子どもから大人まで、将来のゼロカーボンに向けて身近に実践できるものを入れていますので、楽しみながら実践につなげていただければと思います。市内の小学校に寄贈しますので、小学校4年生の「ふくしまのかんきょう」という冊子と2つの相乗効果でやっていけるのではと思っています。

私たちの活動は、やればやるほど効果は上がるけれども、自分独りでやっているとなかなか続かないので、家族ぐるみ、友達、地域でお互いに励まし合いながらやっていくことが大事だと思っています。

〇菊田秀之さん

森林関係から言いますと、二酸化炭素を吸収する量をこれから増やしていかなければならないと思っています。どのくらいの森林が二酸化炭素を吸収してくれるかを考えたとき、木も年を取るとその量がどんどん減ってくると言われています。20年、30年くらいの杉が一番活発に二酸化炭素を吸います。けれども、現状を見てみると、ほとんどの人工林が戦後植えられた木で、50年、60年経っています。ちなみに、20年と80年の木を比べると、吸収量は大体4分の1くらいに減ってしまうと言われています。やはり若い木を増やしていかないと山そのものも駄目になってしまうので、間伐をして、間伐した木は使って、そこにまた新しい木を植えて森林を若返らせる、という森林整備を進めていきたいと考えています。

あと、皆さん、山に対する関心があまりないのかなと思っています。今は木の値段がすごく安くて、それが関心のない原因の一つなのかと思っていて、そういうことがないように、いろいろ皆さんにＰＲしたいなと思っています。例えば、地元の木を使って地産地消で建物を造るということで、2年前には私たちの事務所も福島市で取れた間伐材を使って建てました。こういうことを1つずつＰＲしながら、皆さんに山に対する関心を持っていただけるような活動もこれからいろいろしていきたいと思っています。

〇鈴木明美さん

私は家庭科の教員ですが、教科書自体が大きく変わってきて、共生、環境、この分野がかなり大きく入ってきています。こういったところをしっかりと教育するにあたり、外部講師を招いたりして、一生懸命勉強しながら生徒に伝えています。

今、生徒たちに「あなたたちがやっているエシカル消費って何」と聞くと、「必ず手前取りしている」などと答えます。また、製作活動のときに「今度、何作ろうか」と聞くと、「エコバッグ作りたい」とかと答えます。小さいときからそういった教育を受けてきていることもあるかもしれませんが、私たちもスムーズに教育に入っていけますし、今後もしっかりと見守りながら継続していきたいなと考えています。

〇内池徹さん

電気自動車は、日産自動車で2010年から販売し、今年で13年目になります。ＥＶ（電気自動車）は二酸化炭素を全く出さない車ということで、環境には最適な車です。国も普及を後押しするために補助金を設定して、2030年までに新車販売の構成を20％～30％まで増やす、さらに2030年半ばまでには、100％に増やすという目標を掲げて普及を広めています。

廃車まで考えて車を生産し、二酸化炭素を削減する取り組みもしています。これも目標ですが、日産自動車の生産工場において、二酸化炭素の排出量を2030年までに40％減らすという目標を掲げてやっています。また、バッテリーをそのまま廃棄しないで再生させる「フォーアールエナジー」という会社が浪江に再生工場を持っていて、ごみにしない、再生させるというところでやっています。電気自動車

が普及すれば、蓄電池の再販というところも環境にマッチしてきます。
　そうはいっても、環境問題という1点だけではＥＶってなかなか皆さんの目に留まらないところもあるので、安全性、あるいは災害対策に役立つという視点も併せて紹介しています。安全性で言えば、例えば事故があったときに車が炎上する場面があるかと思います。あれはガソリンに引火して燃えてしまうのですが、そういった事故がＥＶ車の場合は今のところゼロです。それから、災害対策で言えば、福島県も地震で被災する場面が過去に何回かありました。その際に、ＥＶが蓄電池の役割をして、行った先で電気を使える環境を用意するということで、環境対策、二酸化炭素削減だけではないことを紹介しながら活動しています。

〇池田寛さん
　私どもは水素供給に関して、2018年4月から移動式の水素ステーションを運営していて、もともとは郡山市の産業技術総合研究所と福島市飯坂町平野の2拠点で稼働していました。そこから、郡山市のほうは移転して、昨年の5月からは、福島市と浪江町の2か所で展開しています。
　移動式の水素ステーションなので、メリットとデメリットがあります。まずメリットは、移動できるということです。いろいろなイベントなどに水素ステーションを出展して、水素社会の理解をしていただく取り組みをしています。デメリットは、移動式なので水素の貯蔵量がどうしても少なく、ＦＣＶ（燃料電池自動車）の燃料の充填の台数が限られてくることです。なので、福島県内でもまだ需要が少ない地域に移動式水素ステーションを持っていき、そこの場所を開拓して、ＦＣＶの台数が増え需要が増えてきたら定置式のステーションを造ってそちらにうまくバトンタッチできると、我々の役目は果たせるのかなと思っています。

〇丹治千尋さん
　先ほどの運輸部門ということで言えば、県外からいろいろなおいしいものを取り寄せるのもいいですが、やはり地産地消によって、地元のものを地元の人が消費をしていくという、その流れを続けていきたいなと思っています。
　いちいの中の数店舗ですが、2021年から屋根の上にソーラーパネルを設置し、お店の10%から20%の電気を賄う取り組みをしています。景観などが失われてしまうということを考えると、やはり倉庫の上などを使っていってもいいのかなと思います。
　あと、もう一つ、移動販売とくし丸をご紹介したいと思います。徳島県の事業者と一緒に取り組んでいて、今、約12台走らせています。もともと高齢者をターゲットに取り組んでいる事業ですが、買い物難民と呼ばれるお客様がいらっしゃる中で、いろいろな方が車を使ってしまうとやはり脱炭素の取り組みにはならないので、私たちがお伺いすることでいろいろな方のご不便を解消できるのかなと思っています。常にスーパーのような品揃えはできませんが、お客様の選んで楽しむというお買い物をこれからも続けていきたいなと思っています。
　スーパーマーケットとしては、やはり食品ロスが課題になっています。販売できない魚の骨や、肉の脂部分などは市内のリサイクル業者に持って行き、堆肥にしてもらう取り組みをしています。ただ、食品ロスは他にもあって、売れ残りもあります。また、てまえどりをお店でも勧めていますが、うしろどりが常に起きています。ですので、何とかお客様に理解していただけるような、そういった啓発ができればいいかなと思っています。

〇山崎純司さん
　東北電力グループとして、2021年３月にカーボンニュートラルチャレンジ2050というものを策定いたしました。2030年には2013年度比で二酸化炭素排出量半減、2050年度でプラスマイナスゼロ、カーボンニュートラルを実現するという形でいろいろ取り組んでいます。その3つの柱としてやっているのは、再生可能エネルギーの最大限の活用、火力発電所の脱炭素化、電化とスマート社会の実現です。
　再生可能エネルギーの最大限の活用については、福島県では特に水力発電です。東北6県プラス新潟県の中で操業している水力発電所は大体200か所ぐらいありますが、そのうち福島県内には60か所ぐらいあります。

また、つくる電気もカーボンニュートラルに向けてという形で、化石燃料を燃やすのではなくて、化石燃料ではないもので発電する、最終的に2050年にカーボンニュートラルにするということに向けての実証試験も始めています。新潟県の火力発電所では、水素を液化天然ガスと混ぜて燃料として発電するという実証試験を前倒しで始めることしています。また、秋田県の能代火力発電所では、木材などで作ったペレットを石炭の代わりに混ぜて発電する、それも徐々にその量を増やしていって、化石燃料を使う量を減らしていこうという取り組みをしています。

3本柱の3つ目として電化とスマート社会実現という話をしましたが、昨年度から節電アプリを皆さんにインストールしていただき、節電チャレンジに取り組んでいただいて、それに対してポイントを付与する取り組みをしています。自分の家庭で使っている電気を見える化することがデジタル的にできるようになっていますので、このくらい昨日使ったのだと反省したり、昨日は頑張ったなという形で、自分事にしたりしていただける方が増えるように、今後も紹介していければなと思っています。

〇桜井美菜子さん

今年は3月以降、日本の平均気温は記録を塗り替えるということがずっと続いています。そういう中でどうやって生きていくのかということだと思うのですが、福島県の環境活動スタート事業という枠組みで、市内の小中学校で、地球温暖化と福島県の気候変動ということでお話をさせていただく機会がありました。率直に、子どもたちの反応がすごくいいと感じました。意識も高いし、いろいろなことを既に知っていて、「これだけ二酸化炭素が増えてきてこういうことになったんだけれども、これからどうしていったらいいと思う？」と聞くと、小学校の子どもたちは、「電気を小まめに消さなきゃいけない」とか、「ごみを分別しなきゃいけない」とか、「ご飯は残しちゃいけない」とかすぐに出てきます。中学生もとても意識が高くて、今、教育が変わってきているということもあろうかと思いますが、とても頼もしいと思いました。

その一方で、切なくもなりました。というのは、私たちが子どもの頃から当時の大人たちが幸せになろうと思って一生懸命頑張ってきた結果、今のこの気温が高いという状況なってしまって、そんな時代を私たちよりも寿命の長い子どもたちが、生きていくためにどうしよう、こうしようと考えている。だから、せめて彼らには、今の大人は先に死ぬからといって知らないふりしているのではなくて、大人は大人で頑張っているよということはちゃんと見せたいなと思うわけです。

今使っているエネルギーのもとを何に替えていくかということはとても重要なことだと思いますが、エネルギーを使う生活をこれからも続けていくのかということはやはりどこかで考えなきゃいけないと思います。仮にゼロカーボンに今すぐなったとしても、温暖化は止まらない、今出ている二酸化炭素で進んでいってしまうことがどうやら確からしいと世界的に言われています。生活の仕方をドラスチックに変えていくことはとても難しいことかもしれませんが、何かを変えていかなきゃいけない世の中をこれから私たちは生きていくのかなと思いました。

私は転勤族なので、いろいろな自治体で生活をこれまでしてきました。千葉県のある自治体に居たときは、分別がものすごく細かくて、瓶も色によって３種類か４種類に分けたり、金属も、物の中の半分以上が金属か金属じゃないかで再利用するごみに分けたりすごく厳しかったです。福島市はごみの排出量が多いと言われているので、分別した先をどうするかという問題が当然あるのだろうとは思いますが、日々の生活に直結するちょっとずつの積み重ねになると思うので、分別はよろしくお願いしたいと思います。

市長　〇意識改革が大事だし、そういう意識を自然に身につけるのが、子どもの時期だと思います。それが行動に結びつくと、子どもたちは決して無理せずに、自然とエネルギーの節約をするようになると思います。

〇吸収源も大事だというのはおっしゃるとおりで、木材も大いに活用していくことが森林を再生していくことにつながるのだと思います。切って、使って、植えて、育てるというのが森林のサイクルですが、そのサイクルを適切な時期で回していくということが大事なのかなと思います。

〇単に学科を教えるというより、社会に必要なものを自然と身に付けるということを授業の時間を使わなくてもやれると、一番理想的なのだろうなと感じます。

○福島市の部門別の温室効果ガスの排出の動向を見ると、産業部門、家庭部門、業務部門、運輸部門、その他とあるわけですが、一番多いのが運輸部門です。ほかの部門は2013年と2020年を比較すると全部下がっているのですが、この運輸部門だけは20%ぐらい伸びているのです。その点では、運輸部門の排出量をいかに減らすかというのが大事で、ＥＶという形で排出が抑制されれば、しかも、その電源が温室効果ガスを排出する火力発電などではなく、再生可能エネルギーなどに代わってくれば、大きな効果を持ってくるのかなと思います。我々も車の温室効果ガス抑制というのは非常に重要だと思っていて、市でも、原則ＥＶ、ＰＨＶ（プラグインハイブリッドカー）にしています。かつ、二酸化炭素を排出しない電力の地産地消として、あらかわクリーンセンターのごみ焼却熱を電源として使っていますので、その点ではかなり運輸部門を抑えられ始めているのだろうと思います。今後も、車だけではなく、使う電源自体もどうするのかを考えないと、単に車の動力がガソリンから火力発電に置き換わっただけというのでは意味がないので、そういった面も含めて意識啓発していけたらいいなと思います。

○水素に関していうと、最初は本当に需要が少ないので、移動式でもないと割に合わないでしょうけれども、ようやく定置式の水素ステーションが北幹線道路沿いにできました。
ただ、一方でまだ車が少ないし、車種も少ないです。これはＥＶにも言えることだと思いますが、選ぶのに自分の生活感覚やビジネスに合ったものがないというのが、使うのに障壁になっているのだと思います。
実は、メロディーバスは最初水素バスでやりたいと思っていたのですが、水素バスは大きなバスしかないのです。それだと普段使いが不便なので、あの形のバスにしたのです。ただ、いずれ出てくればという気持ちもあります。ＥＶで小型のバスもあるみたいなので、ＥＶでメロディーバスみたいなものをまた造ってもいいかとも思っています。
あと、水素の場合はコストが問題なのですが、使い方によっては、いろいろな面で蓄電池の代わりになるというのが大きなメリットかなと思います。再生可能エネルギーをやるにも、電線を引くというだけで実は相当なコストがかかってしまって、その場では発電ができないというケースがあるのですが、一旦水素とかに貯めておいて、その上でそれを分解してエネルギー、電気に変えるという取り組みができたら、より汎用性が出てくると思います。市でも市役所本庁舎西側の市民センターで新たに水素関係を取り入れますので、そういった取り組みを通じて皆さんの意識啓発をしながら、普及に取り組んでいきたいと思っています。

○移動販売の効果は、それぞれの人が車で買い物に行くことを考えれば、企業のエネルギー消費の削減にカウントしてもいいと思います。そういう評価は我々がこれから社会的に確立していかなければならないと思うのですが、そういう試算もやっていいただくと、より移動販売の社会性、効果が明確になるのかなと思います。
それから、食品残渣については我々もいろいろ取り組んでいます。最近では、「ふくしまタベスケ」という、賞味期限や消費期限が近くなった食品や、規格外などの訳あり商品など、食品ロスになる可能性がある食品を出品していただき、販売につなげる食品ロス削減マッチングサービスを導入しました。今、７店舗が参加していますが、出品したものはだいたい売れているので、非常に有効かなと思います。企業としては、安売りする文化をやりたくないというところもあるとは思いますが、結果的に廃棄するのであれば、まだそちらのほうがいいだろうと思います。
また、市では給食センターで給食を作っていますが、そこでも食品残渣が大量に出ます。そういったものも、これからバイオガス発電みたいな形でやれないかと検討しています。その点では、企業さんそれぞれの取り組みもいいですが、こういったものにまとめてやるとそれだけ経済性も高まるので、そうしたことも可能かなと思っています。
いずれにしても、今あるものをできる限り使ってロスをなくす、資源化するということは、市役所もうまく媒介になりながら取り組みを進めていきたいと思っています。

○水力は、国に対しても言っていますが、今、これだけ雨が降って、防災の強化と言われているわけです。そうなると、水を貯める機能の強化が求められ、それとうまくタイアップした形の発電というのは非常に有効なのです。山を切り崩して災害の危険性を高める再生可能エネルギーではなく、災害の危険性から守って、かつ発電をすることになるのです。そういったことは、非常に重要だと思っています。
また、見える化の話がありました。これはやはり非常に有効な手段で、見えるだけでやっぱり変わってくると思います。うちも太陽光発電をやっていますが、エアコンも小まめに消したほうがいいのか、あるいはもうずっとつけっ放しのほうがいいのか、そんなことを確かめています。あとは、車の燃費表示。いかに燃費を落とすかということに今執心していて、真夏でもエアコンをつけずにできるだけ窓を開けるなどして燃費を稼いでいます。もう、けちというよりはゲームなんです。そうやって体に悪くならない程度に頑張れるようになると、その積み重ねが社会的に非常に大きくなるという感じもするし、見える化の一つの効果かなと思います。

○ごみなんかも、福島市は非常に行政の関与が少ないんです。ごみに限らず、福島市って、市民に負担をかけることをできるだけやらないというのが実はいろいろな面で多いんです。だから、市民の皆さんも、自分がやらなきゃいけないことでも行政にやれ、やれと言っている体質が何となくあるんじゃないかと思っています。結果として、後れているんです。もう一つ、事業者も育っていなかったんです。ごみの分別は市だけでできるのではなくて、市が回収した後にそれをちゃんと資源化してくれる事業者がいないとできないんです。やっぱり市としても事業者をどんどん育てる、事業者にやってもらうようにしなくちゃいけない。市ができないからやらない、市もやらないから事業者も育たない、要するに悪循環になっていたわけですが、今、一生懸命変えようとしています。

（2）市長から参加者への提案

○市長

デジタル化というのは非常に大事で、実は、福島市では今度電子クーポンに取り組みます。高齢者のデジタル化についても、市内でデジタルクラブを作るなどいろいろやっています。そこで、ちょっと私から提案ですが、さっき丹治さんから移動販売の話がありました。今度、普通に持っていくのとは別に、デジタルで注文を取ったものに関しては持っていくみたいな実証実験を、例えば市と一緒にやるとかどうですかね。あまり手間暇かかって良くないですかね。

○丹治千尋さん

移動販売を始める前にネットスーパーということでやってみたのですが、やはり、ネットは無理、ボタン1つ押すのも怖いという高齢者が非常に多くて、デジタル化を高齢者にお勧めするのは、時間もかかるし、相手の方はまず拒絶から始まったりしますね。

○市長

私もそれでデジタルクーポンというのはあえて控えていたんです。でも、今回、変えるんです。高齢者にも全員電子クーポンを渡して、それで皆さんに市の公式LINEを入れてもらうように、スーパーでお手伝いするんです。現に、市ではデジタルの教室をずっとやっていますし、さらにデジタルクラブという学び合いのクラブをつくっています。さらに、一歩進んだところいうと、シルバー人材センターでは、デジタルの指導をする人も出てきています。現に、市役所で今やっているサポートデスクでは、月、水、金のうちの水曜日はシルバー人材センターの人にやってもらっています。

福島市は高齢者に優しいデジタル化というのをやっているので、移動販売を行っている一部の地域でやれば、一応、行政のモデル事業みたいにやれると思うんですね。そういう形で、簡単なものをつくってやっていくというのはありかなと思います。あくまでも、一度にやるというよりは実証実験的にやってみたらどうかなと思っています。

○市長

東北電力さんにぜひお願いしたいのは、蓬莱ダムももう大分古くなっていますよね。あそこで水を貯められるかどうかで、阿武隈川の安全性というのは随分と変わってくるんです。国交省も、もう少し貯める容量を上げないと厳しいと言っているので、大きな投資ですけれども、リニューアルするなりして、防災と電力の両立ができないかなと思います。

また、先ほど申し上げたように、食品残渣で発電できないかなと考えているんです。フィンランドでは一般の方の食品残渣まで受け取るようなものが社会的なシステムになっているんです。そこまでいかなくても、食品残渣を出す大処だけでもやれそうな気がしているので、そういったものも取り組めるといいなと思いますが、いかがでしょうか。

○山崎純司

ダムのリニューアルとか、石炭、化石燃料を使わない発電という形のアイデアは、いろいろいただければ検討には行くのかなと思います。

（3）ゼロカーボンを進めるにあたり大事だと思うこと、必要だと思うこと

○池田寛

小学生とか、これからの福島の将来とか、あるいは日本を背負っていくような人材に対して、来てもらうだけじゃなくて出前で取り組みを紹介する講座もやりたいなと社内で考えているのですが、そういったとき、どうしても福島市との協力が必要だと思います。あとは、福島市が主催するこういったイベントにも積極的に出ていきたいなと思います。一番は水素自動車とか電気自動車とか、化石燃料を使わない自動車やそういった機械を子どもたちに知ってもらう取り組みの場をもう少しいろいろ展開できればいいのかなと。ただ、一民間企業が自分たちだけで自前でやるというのはなかなか難しいので、そういったときは福島市とか、あるいは福島県とか、地場企業とかと一緒にいろいろタイアップして、盛り上げていければいいのかなと思っています。

○田崎由子

皆さんの意見を聞いてなるほどと思ったのは、家庭部門は全てとつながっているということです。まず自分に今できることは何かということを考えて、それがどのように環境に良いのかなと自分事にすることが、最初にできることかなと思っています。その上で、推進員として自分ができることをまずはやってみて、それを出前講座やこういったイベントのときにお知らせするのが私たちの役目であり、「これなら一緒にできませんか」とか「こうやるとすぐにできますよ」というような伝え方をしていくことが必要かなと思いました。

あともう一点、デジタル化で難しいのは、そこに切り替える方の意識をどういうふうに持っていくかだと思います。便利さを伝えるだけでなく、怖さやリスクもきちんと伝えないと、怖いからいいですとなってしまうと思うので、その辺をよく教えていただければと思います。高齢社会になって、何かあったときの連絡にスマホのLINEとか、いろいろなアプリがこれからは必要になるかなと思っています。行政とのつながりもスマホでやり取りできるようになると、高齢者がわざわざ役所に出向いて行かなくてもその場で情報が得られるようになるし、買い物などでも使えるようになると、生活の質を落とすことなくやっていけるかなと思っています。

これからも皆様と一緒に、こういった意見交換を使いながら、地域で省エネ、省資源ということで、行政と市民の間に立って、役割を担っていけたらいいなと思いました。

○内池徹

本日行われている環境フェスタでは、小さいお子さんを対象に「わくわくエコスクール」を開催し、電気の仕組みや、電気を使うことによってどれだけ二酸化炭素が削減されるかという話を分かりやすく紙芝居ふうにやっています。参加者には電池を使わないで手回しで電気を発生させて動かすミニカーをプレゼントするのですが、そういったものがお子さんに環境意識を広めていく活動の一つかなと思ってやっています。しかし、まだまだ小さいなということをすごく感じまして、もうちょっと皆さんに伝えられるような活動をしていかなくてはと思いました。

○菊田秀之

今後、市内の子どもたちや一般の人に、森林というのはこういう理由で大切なんだよ、これからやっぱり新しくしていかないと駄目なんだよ、ということを伝えていきたいと思っています。

水林自然林においても、子どもたちにいろいろなことをやってもらって自然と親しむ、木と親しむというイベントをやっていますので、ぜひ来ていただきたいなと思います

○鈴木明美

現在ソフトボール部の顧問をしていますが、昔と比べて、今は間違いなく暑さが全然違います。私の時代は、水は飲むなと言われて部活動をしていた時代ですが、今、水を飲まなかったら死んでしまいます。とにかく環境が本当にまずいことになってきているというのは、大人たちは間違いなく分かっているはずです。今日、皆さんのお話を伺って、さらに強化して教育に当たりたいと思います。高校生など、最近の子どもたちは頭が非常に柔軟なので、若者たちが簡単に参加できるような、気軽に行けるようなさまざまなイベント、をぜひどんどん開催していただき、学校としても生徒たちに参加を促して、皆さん協力し合って、ぜひともこの環境問題を何とかしていきたいと改めて思いました。

○丹治千尋

やっぱり自分事にするというところが本当にキーワードだなと思いました。何ができるかということを考えたりする場面はあるけれども、実際に実行してみないと実感も湧かないし、続けようかやめようかというところも自分の判断かなと思いました。そういったことを自分から発信する立場としても、まずはやってみようと。やってみて、駄目だったら次もあるかなと。そういったことでいろいろなことに取り組んでみて、実感したことをぜひお客様や、こういったイベントの中で皆さんに伝えていければいいかなというふうに思っています。

○山崎純司

皆さんのお話を聞いて、いろいろな取り組みを聞いて、本当に目からうろこの部分もありました。家族、あとは実家の両親とか義理の両親とかにも話をしていって、自分事として少しでもできる人たちを増やしていくことをこれからやっていきたいなと思っています。

○桜井美菜子

今、何が起こっているのかということをしっかりと淡々と説明する、伝えることが大事だし、最初の一歩だということを改めて確信を持ちました。今日の話の中で、自分事にするということと見える化するということがキーワードだなと思いました。個人からいろいろ広げていけるように、私もしっかりやっていこうと思います。

３　まとめ

改めて環境問題は、一人一人が、そして各主体がいかに自分事として取り組んでいけるようにできるか、ここが大きなポイントだと思いました。その点では、市として皆さんにそういう行動を取っていただけるように、さまざまな学びの機会を提供していかなきゃいけません。それから、学ぶだけではなくて行動のモチベーションを上げるような、まさに見える化の取り組みもうまく取り入れながら、人々の行動を促していくことが大事かなと思いました。

市のほうもこれまでの殻を破って進めていかないと、どうにもならないのが今この時代です。我々も取り組んでまいりますので、ぜひ皆さんもそれぞれの立場でこの環境問題をはじめとして、いろいろなチャレンジを進めていただくようお願いして、今日のまとめにさせていただきたいと思います。